

バラエティー番組における「おネエことば」の人称代名詞の使用 —名大会話コーパスにおける人称代名詞との異同—

The use of personal pronouns of “Onee (transgender men) language” in variety shows: Comparison with the Nagoya University Conversation Corpus

賈 伊明

JIA YIMING

This study is about the usage of first and second personal pronouns by “Onee” in Japanese variety shows, focusing on the comparison with the data of Nagoya University Conversation Corpus (NUCC). “Onee” (「おネエ」) is a Japanese word which refers to transgender men, and “Onee language” refers to the way they talk. The research questions are as follows: (i) in “Onee language”, what are the characteristics of each personal pronoun?, (ii) what are the characteristics of each personal pronoun in NUCC?, (iii) what are the similarities and differences between the use of personal pronoun by cisgender men and by “Onee”?

Regarding the first research question, the use of personal pronouns by “Onee” has similar features to cisgender women’s use. However, when we observe the data in “Onee language”, we can also see the use of personal pronouns which are used by cisgender men. Regarding the second research question, the investigation of NUCC shows that the use of personal pronouns by cisgender is different between men and women. Regarding the third research question, the similarities between the use of personal pronouns by cisgender and “Onee” are partly observed in the second person. On the other hand, the differences between them are seen in the first person. Particularly, female language is used by “Onee”, but not used by cisgender men. As for the connection between “Onee language” and role language, we can consider that “Onee language” is a kind of role language and has the same features as role language.

キーワード おネエことば 人称代名詞 役割語 「男性用」表現 「女性用」表現

1. はじめに

真田(1992:19)は、日本語の一つの特徴は男女の用いる言葉が異なることであると述べている。そして金丸(1997:15)は、日本語で男女差が最もよく現れるものの一つは、人称代名詞であると述べている。本研究はこの人称代名詞を対象とする。

近年、いわゆる「おネエ」系のタレントがメディアで活躍している。「おネエ」には、仕草や容姿は女性のように見え、言葉遣いは「女性語」に近い「おネエことば」を用いるという特徴がある。本研究は、テレビ番組などに出演する「おネエ」を「法的には男性であり、番組や著書などで自ら『おネエ』と認めている人」と定義する。そして、「おネエことば」を「『おネエ』が用いる言葉遣い」と定義する。

本研究の目的は、「おネエことば」および非おネエの言語における人称代名詞の使用実態を明

らかにし、さらに、両者の異同を明らかにすることである。「おネエことば」のデータとしてはバラエティー番組を用い、非おネエの言語のデータとしては「名大会話コーパス」(Nagoya University Conversation Corpus, 以下では「NUCC」)を用いる。

2. 先行研究

金水(1989:100)は、日本語の代名詞と人称について次のように述べている。まず、西洋の諸言語と異なり、日本語ではいわゆる「代名詞」の使用頻度が高くなく、特に人を指し示す場合、実名・愛称、地位・役職名、親族名、職業名など様々な表現を用いることができると述べている。そして、以下のような一人称代名詞、二人称代名詞の例を挙げている。

一人称代名詞:わたし、わたくし、あたし、ぼく、おれ、おいら、わし…

二人称代名詞:あなた、きみ、おまえ、あんた、おたく、きさま…

(金水 1989:100)

益岡・田窪(1992:222)は、日本語の話し言葉には、主に男性が用いる表現と主に女性が用いる表現があり、両者には体系的な区別があると述べ、文末に用いられる表現(p. 222-224)、感動詞(p. 224)、話し手・聞き手を表す表現(p. 225)の例を挙げている。益岡・田窪(1992:225)は、話し手・聞き手を表す表現のなかの人称代名詞を、主に男性が用いる表現、主に女性が用いる表現、男女ともに用いる表現の3つに分類している。そして、「おれ」、「ぼく」、「おいら」、「わし」、「おまえ」、「君」は主に男性が用いる表現、「あたし」は主に女性が用いる表現、「わたし」、「わたくし」、「あなた」、「あんた」、「おたく(さま)」、「そちら(さま)」は男女ともに用いる表現であると述べている。金丸(1997:15-16)は、人称代名詞は相手との親疎・上下関係、話題のフォーマリティによって選択されるが、「わたし」のような男性にとってフォーマルで丁寧な人称代名詞を、女性はインフォーマルな場面でも用いる傾向があると述べている。一方、小林(1999:134-135)は、職場における自然会話のコーパスを分析した結果、自称詞・対称詞の男女差は縮まりつつあると述べている。

「おネエことば」に関する先行研究は少ない。鈴木(1998:81-82)は、「おネエことば」は女性語のある種の特徴を「グロテスクに誇張したパロディ」であると述べている。これに対してマルチェッロ(2016:143)は、「おネエことば」は女言葉だけではなく男言葉にも基づいていることを無視してはいけないと述べている。そして、彼自身の新宿二丁目におけるフィールドワークの観察に基づき、おネエ話者は「わたし・あたし・うち」のような女性語的な一人称代名詞を選択することも多いと述べている。

阿部(2010)は、昭和の男娼(男色を売る男性)のことばについて分析を行っている。具体的には、1949年に発行された雑誌の記事のうちで、「男娼」に関わるものを取り上げ、彼(彼女)らの発話に見られた一人称の使い方を詳細に分析している。その結果、彼らが用いる一人称は、1種類ではなく、発話場面に応じて異なる表現を用いる傾向があると明らかにしている。特に、聞き手に男性がいるかどうか、その場の話題、聞き手との関係など、色々なファクターが影響を与えると述べている(阿部 2010:73-77)。そして、「あたし」は男娼としての「職業語」に近い言葉であると述べている(阿部 2010:74)。また、阿部(2010:77)は人称代名詞以外の言語特徴

も分析し、昭和の男娼の言語使用は、現在の「おネエことば」とその特徴が同じであると述べている。マリィ(2018:22)は、「おネエことば」は「典型的とされる『女性ことば』の集合体(主に)『男性』が過剰に発話したものである」と述べている。

本研究と同様に、テレビ番組をデータとして用いて「おネエことば」の考察を行った研究としては、河野(2008)と河野(2016)が挙げられる。河野(2008)は、5つのテレビ番組において「おネエ」が出演した場面を取り上げ、人称代名詞、感動詞、文末表現、特殊的な表現の4つの側面から、テレビにおける男性の「女性語」の使用について分析を行っている。「おネエことば」は伝統的な「男性語」でもなく「女性語」でもない日本語の変種の一つであり、「主に女性専用形式の使用および男性専用形式の不使用」という特徴があると述べている(河野 2008:111)。河野(2016)は、バラエティー番組と映画、漫画、小説のようなフィクション作品における「おネエ」系のタレントと「おネエ」のキャラクターによる発話を取り上げ、彼(彼女)らが用いた人称詞について詳細に分析している。河野(2016:115)は阿部(2014:46)の定義を引用した上で、「おネエ」を「生物学的に男性だが(あるいは男性であったが)、装い・しぐさ、言葉遣いなどで女性ジェンダーの特徴を有する人」と定義している。自称詞については、全体的に女性専用形式の「あたし」と「わたし」を用いる人が多い傾向が見られた。男性専用形式の「ぼく」で自称した発話者は3名いるが、3名とも男性の服装をしている人であったと述べている。一方、対称詞については、バラエティー番組とフィクション作品で異なる結果が得られた。フィクション作品における13名の対象者は全員が対称詞を用いたが、バラエティー番組においては、対称詞を用いた人は半分以下であった。

河野(2008)などの先行研究は、「おネエことば」のみを考察しており、非おネエの言語における性差との比較の議論と考察が不十分と思われる。したがって、本研究は自然会話コーパスを用い、非おネエが用いる人称詞に関する考察も行った。

3. 研究課題

以上の先行研究を踏まえ、以下の3つを本研究の研究課題とする。

- 課題 1. 「おネエことば」において、本研究が研究項目語とする各人称代名詞の使用にはどのような特徴があるか。
- 課題 2. 「NUCC」に見られる各人称代名詞の使用にはどのような特徴があるか。
- 課題 3. 「おネエ」が用いる「男性用」の人称代名詞と「NUCC」の男性発話者が用いる人称代名詞にはどのような異同があるか。

4. データの概要

4. 1. バラエティー番組について

本研究は「おネエ系タレント」が出演したバラエティー番組を対象とする。「おネエ」が出演した部分のトークを、映像を見ながら、ひらがなで文字化した。分析材料を選定する基準は以下の3点である。

- (1)法律上、性別を「女性」に変更した分析対象者は、変更前の発話を用いる。
- (2)「おネエ」同士の会話だけでなく、「おネエ」と非「おネエ」の会話も取りあげる。
- (3)同じ人物であっても、発話時の年齢によって用いる表現が異なる可能性があるため、2010年から2017年に放送されたものを選ぶ。

以上の基準に基づき、表1のバラエティー番組を選んだ。各番組において「おネエ」による発話の分量は異なるので、バランスをとるために回数を調整して選定した。合計およそ23時間20分となった。

表1 選定したバラエティー番組

番組名	回数（時間数）
「月曜から夜ふかし」（以下「月曜」）	36回（トークの部分は約15分／回）
「ミッツ・マングローブ&ダイアナのおネエタクシー」（以下「タクシー」）	12回（約10分／回）
「さんまのホントの恋のかま騒ぎ」（以下「かま騒ぎ」）	4回（約60分／回）
「嵐にしやがれ」（以下「嵐」）	4回（約40分／回）
「金曜★ロンドンハーツ」（以下「ロンハー」）	2回（約50分／回）
「ダウンタウンDX」（以下「DX」）	2回（約40分／回）
「Oh!どや顔サミット：おネエが忘れられない人生で一番燃えた恋SP」（以下「サミット」）	1回（約40分／回）
「行列のできる法律相談所：マツコ軍団が襲来！おネエJAPANが謝罪しますSP」（以下「相談所」）	1回（約45分／回）

本研究の「分析対象者」は、表1で挙げた番組に出演した「おネエ」の一部である。発話が極めて少ない発話者は対象としない。

分析対象者と各対象者が出演した番組は以下の表2の通りである。年齢は2018年9月現在のものである。対象者の情報は、個人のホームページなどを参照にしたうえで、表2に示す。

表2 分析対象者の一覧

No.	名前	年齢	職業	出演した番組
1	IKKO	56	タレント、芸人、美容家	「DX」、「かま騒ぎ」、「嵐」、「ロンハー」、「サミット」
2	KABA.ちゃん	49	タレント、振付師	「DX」、「かま騒ぎ」、「嵐」、「ロンハー」、「サミット」

3	クリス松村	非公表	タレント、フィットネスインストラクター	「かま騒ぎ」、「嵐」
4	はるな愛	46	タレント、歌手、俳優	「DX」、「かま騒ぎ」、「嵐」、「サミット」
5	マツコ・デラックス	45	女装芸能人、司会者、エッセイスト	「月曜」、「かま騒ぎ」、「嵐」、「相談所」
6	ダイアナ・エクストラバガンザ	42	女装家、美容家	「タクシー」、「かま騒ぎ」、「相談所」
7	前田健	44 (満 44 歳没)	お笑い芸人、俳優、ものまねタレント、振付師	「かま騒ぎ」、「ロンハー」
8	真島茂樹	非公表	ダンサー、振付師、俳優	「DX」、「かま騒ぎ」、「ロンハー」、「サミット」
9	山咲トオル	49	漫画家、タレント	「DX」、「ロンハー」、「サミット」
10	ミッツ・マングローブ	43	女装家、タレント、ドラッグクイーン	「タクシー」、「DX」、「かま騒ぎ」、「嵐」、「ロンハー」、「サミット」、「相談所」
11	佐藤かよ	29	ファッションモデル、タレント	「DX」、「ロンハー」
12	IVAN	34	ファッションモデル、タレント、ミュージシャン	「DX」、「ロンハー」
13	ぺえ	26	女装タレント	「DX」、「ロンハー」
14	ブルボンヌ	47	女装パフォーマー、エッセイスト	「DX」、「ロンハー」
15	小椋ケンイチ	50	ヘアメイクアーティスト	「DX」、「ロンハー」、「サミット」
16	GENKING	32	芸人	「DX」

4. 2. NUCC について

非おネエの言語のデータとして、日本語母語話者同士による雑談を文字化したコーパスであ

る NUCC (藤村・大曾・大島 2011) を用い、検索システムは「中納言」を用いる。NUCC は合計 129 個の会話からなり、時間としては約 100 時間である。発話者の性別は女性 162 人、男性 37 人である。発話者の年齢は 10 代の前半から 90 代前半にわたり幅広いが、最も多いのは 20 代前半と後半である。会話参加者の人数は 2 人から数人である。発話場面は親しい者同士の雑談が多いが、初対面同士、学校内の先輩一後輩の関係も含まれている。

4. 3. 研究項目語について

1 人称代名詞も 2 人称代名詞も単数のみを対象とする。NUCC においては、「私」という一人称代名詞が漢字で「私」と表記されるほかに、ひらがなで「わたし」、「わたくし」と表記されている場合がある。一方、バラエティー番組のデータは、上述の通り筆者がすべてをひらがなで書き起こした。したがって、本研究の研究項目語は以下の表 3 にあるものとする。

表 3 本研究の研究項目語

分類	具体例	
人称代名詞	1 人称代名詞	私 (わたし、わたくし)、あたし、僕 (ぼく)、俺 (おれ)、うち、わたし
	2 人称代名詞	あなた、あんた、きみ、おまえ、てめえ

本研究では、主に男性が用いる言語表現を「男性用」と呼び、主に女性が用いる表現を「女性用」と呼ぶ。金丸(1997)等を参考にして、僕、俺、わたし、きみ、おまえ、てめえは「男性用」、わたし、わたくし、あたし、うち、あなたは「女性用」とする。

5. 結果と考察

5. 1. 「おネエ」による各人称代名詞の使用

本節では文字化したデータを観察し、考察を行う。以下の 5.1.1 節では一人称代名詞を、5.1.2 節では二人称代名詞を扱う。

5. 1. 1. 「おネエ」による一人称代名詞の使用

「おネエ」の発話において一人称代名詞が用いられたのは合計 927 回である。そのうち、最も回数が多いのは「あたし」であり、639 回用いられている。次は、「わたし」であり、計 236 回である。「わたくし」の使用は 1 回もない。残りは、「ぼく」(44 回)、「うち」(5 回)、「おれ」(3 回) という順である。

また、表 2 に挙げた分析対象者ごとに一人称代名詞を観察したところ、2 種以上の一人称代名詞を用いる人が大半であった (16 名中 12 名)。発話者は会話の場面と聞き手との関係によって一人称代名詞を使い分けている可能性があると考えられる。また、同じ人物でも「男性用」と「女性用」の一人称代名詞を両方とも用いる人がいた。以下の表 4 は、本研究の分析対象者が用いた一人称代名詞の一覧である。

表 4 分析対象者ごとの一人称代名詞の種類

No.	名前	一人称代名詞の種類数	一人称代名詞の表現（使用回数の多い順）
1	IKKO	2	わたし、あたし
2	KABA.ちゃん	2	あたし、わたし
3	クリス松村	2	あたし、わたし
4	はるな愛	2	あたし、わたし
5	マツコ・デラックス	3	あたし、わたし、うち
6	ダイアナ・エクストラバガンザ	2	あたし、わたし
7	前田健	4	ぼく、わたし、おれ、あたし
8	真島茂樹	1	ぼく
9	山咲トオル	2	わたし、あたし
10	ミッツ・マングローブ	4	あたし、わたし、うち、ぼく
11	佐藤かよ	1	あたし
12	IVAN	2	あたし、うち
13	ぺえ	2	わたし、あたし
14	ブルボンヌ	1	わたし
15	小椋ケンイチ	2	ぼく、わたし
16	GENKING	1	ぼく

16名の分析対象者は3つのグループに分類することができる。まず、「女性用」の一人称代名詞しか用いないグループである。このグループが最も人数が多く、該当するのは、IKKO、KABA.ちゃん、クリス松村、はるな愛、マツコ・デラックス、ダイアナ・エクストラバガンザ、山咲トオル、佐藤かよ、IVAN、ぺえ、ブルボンヌの11人である。彼（彼女）らは2種類以上の一人称代名詞を用いているが、すべて「女性用」である。以下に例を挙げる。

(1) マツコ・デラックス：なんですぐわすれちゃうんだろ、わたし。

（「月曜」2016/05/23 下線は筆者）

(2) クリス松村：そうなの。

やっぱ、あたしをね、恋人だって、認めてくれる。

（「かま騒ぎ」2012/08/17 下線は筆者）

次は「男性用」の一人称代名詞しか用いないグループである。このグループに該当するのは GENKING と真島茂樹である。この2名は、「男性用」の一人称代名詞である「ぼく」のみを用いていた。ただし、同じ「男性用」の一人称代名詞であるが、「男性性」が強めの「おれ」の使用は一回も見られなかった。具体的には以下の例が挙げられる。

(3) 真島茂樹：ぼくでしょ？

うん、もちろん。

(「ロンハー」 2015/06/09 下線は筆者)

(4) GENKING：ぼくは、カミングアウトは、今年3月1日に、テレビの初登場と同時で、カミングアウトしたんですけど。

(「DX」 2015/07/31 下線は筆者)

最後のグループは、「男性用」の表現と「女性用」の表現を両方用いたグループである。このグループに該当するのは前田健、ミッツ・マングローブ、小椋ケンイチの3人である。このうち、前田健が自称する際に最も頻繁に用いたのは「男性用」の「ぼく」であるが、本研究が扱った番組の最中に一度だけ女装したことがあり⁽¹⁾、その時は「ぼく」は用いられず、女性用の「わたし」と「あたし」のみが用いられていた。そして、ミッツ・マングローブ、ほぼ、「女性用」の「あたし」または「わたし」を用いていたが、「男性用」の「僕」を用いた例が1回だけある。小椋ケンイチは男性用の「僕」が4回、女性用の「わたし」が3回であった。以下に具体例を挙げる。

(5) 小椋ケンイチ：ぼくは長男ですけど…。

(「DX」 2015/07/31 下線は筆者)

(6) ミッツ・マングローブ：ぼくは男の人が好きです。

(「嵐」 2011/12/24 下線は筆者)

この2つの例は、発話者が男性の立場から発した発話である。例(6)の発話場面は、対象者が父親に自分が同性愛者であることを告白した際の発話を再現したものである。家族の前であるため、自称詞の選択を配慮し、最も頻度が高い「女性用」の「あたし」ではなく、あえて「男性用」の「ぼく」を選択したと考えられる。

5. 1. 2. 「おネエ」による二人称代名詞の使用

本節では、「おネエ」が用いた二人称代名詞の使用を考察する。データを集計した結果、合計366回の二人称代名詞の使用例が見られた。そのうち、最も多く用いられた二人称代名詞は「あんた」(206回)であり、以下は「おまえ」(94回)、「あなた」(55回)、「てめえ」(8回)、「きみ」(3回)という順である。

そして、同一人物が2種類以上の二人称代名詞を用いていたのが半数以上であった。この特徴は一人称代名詞と同じである。また、二人称代名詞のバリエーションは一人称代名詞よりも多かった。そして、16名の対象者のうち、二人称代名詞を一回も用いていない人が6名いた。そして、一回しか用いていない人も2名いた。以下では、「おネエ」が用いる二人称代名詞の使用傾向をさらに細かく観察するため、マツコ・デラックスのデータを詳しく分析していく。

{マツコ・デラックス}

マツコ・デラックス（以下では「マツコ」）はラジオ、テレビなどで最も活躍している「おネエ」系タレントの1人である。マツコは、番組などに出演する際に常に女装しているが、私生活では普通の男性の格好が気楽であるため好きだと語ったことがある⁽²⁾。本研究のデータにおいて、マツコは4種類の二人称代名詞を用いていた。使用回数の多い順に、「あんた」(138回)、「おまえ」(85回)、「あなた」(12回)、「てめえ」(5回)である。マツコによる一人称代名詞は、すべて「女性用」の表現であり、「男性用」の「ぼく」と「おれ」の使用は一例もなかった。一方、二人称代名詞の使用では、全体的に「女性用」の「あんた」と「あなた」を用いる例が多かったが、「男性用」の「おまえ」と「てめえ」の使用も多く見られた。すなわち、マツコは二人称代名詞を用いる際に、「男性用」の表現と「女性用」の表現の両方を用いていた。使用例を以下に挙げる。

(7) (はるな愛への発話)

その前に、あんたが39歳だってゆう問題のほうかね...

(「嵐」2011/12/24 下線は筆者)

(8) (松本潤への発話)

あなたにどうあたしが声をかけたらいいのかわかんないのよ。

(「嵐」2012/12/22 下線は筆者)

(9) (村上信五への発話)

なにを驕ってんだ、おまえは。

(「月曜」2016/06/20 下線は筆者)

(10) (村上信五への発話)

だから、てめえ何度言ったらわかんだよ。

(「月曜」2016/06/20 下線は筆者)

5. 2. NUCCにみられる各人称代名詞の使用

4.3節で述べた研究項目語をキーワードとして中納言を用いて検索し、検索結果をダウンロードする。そして、結果をExcelで開く。発話者には「F/M+3桁の数字」という形式のIDがつけられている。Fは女性、Mは男性を意味している。

5. 2. 1. 女性による人称代名詞の使用

複数形などの非該当例を削除したうえで、女性による一人称代名詞と二人称代名詞を集計し

た結果は表5のようにまとめられる。

表5 NUCCにおける女性による人称代名詞の使用

一人称代名詞	回数	比率(%)	二人称代名詞	回数	比率(%)
私、わたし、わたくし	4755	83.51	あなた	193	47.65
僕、ぼく	7	0.12	あんた	177	43.70
俺、おれ	0	0	君	19	4.69
あたし	929	16.32	お前、おまえ	16	3.95
わし	0	0	てめえ	0	0
うち	3	0.05			
総計	5694	100	総計	405	100

表5が示すように、一人称代名詞の使用は二人称代名詞より多い。鈴木(1973:130)は、現代日本語には目上の人に対して用いることができる人称代名詞がないと述べている。「名前+さん」という対称表現が多く用いられる。したがって、このような結果が出た理由は、日本語の言語習慣と関わっている。女性による使用例が最も多い一人称代名詞は「私(わたし、わたくし)」であり、以下は「あたし」、「僕」、「うち」、「俺」「わし」という順である。「僕」と「俺」の使用は極めて少ない。二人称代名詞の場合は、最も多く用いられるのは「あなた」であり、以下「あんた」、「君」、「おまえ」という順である。「てめえ」の使用例は皆無であった。

自然会話コーパスを用いた先行研究は少ないが、小林(1999)はその一つである。小林(1999)は、職場における自然会話を用い、考察を行った研究である。結果は、女性発話者が自称する場合は、「わたし」、「あたし」、「わたくし」しか用いない。本研究では、小林(1999)の結果と比べると、一人称代名詞のバリエーションがより豊富に見られた。そして、小林(1999)においては、二人称代名詞は「あなた」と「あんた」しか用いられていなかったが、本研究は、NUCCを用いたため、職場のほかに、家庭内の会話、友人間の会話もある。したがって、二人称代名詞の使用には「君」、「お前」のようなより砕けた表現も見られたと考えられる。

また、幾つかの興味深い現象が見られた。

まず、女性による一人称代名詞の使用に「僕」の使用例が見られた。黒須(2008)は、「ぼく」は「男性専用」の一人称代名詞であると述べている。しかし、NUCCにおいては女性による使用例が63例みられた。女性が用いる「僕」の使用例を考察した結果、63例のうちの56例は男性の発話を引用した例であることがわかった。一人称代名詞として用いられた例は7例しかなかった。そして、すべては同じ発話者F008による使用例であった。F008は20代前半で、愛知県出身である。本研究のデータにおいて、7回「僕」を用い、すべて自称用法であった。F008による「僕」の使用例の一部を以下に挙げる。

(11) F008 : うん、僕もそう思う。

(12) F008 : 文字化け。

聞くけどさ、なんで僕の性格ってさー断言するさー。

(13) F008 : そうねー、僕もそう思うわ、ちくしょう。

(NUCC : data020 下線は筆者)

西田(2011)は、漫画、アニメーションなどのフィクション作品でよくみられるキャラクター、通称「ボク少女」の言語特徴について、分析を行っている。最も代表的な特徴は、一人称の「ボク」を多用することであると述べている。今回の調査では、F008 は一人称代名詞の「僕」を用いていたが、例 13 の「そうねー」のような「名詞+ね」の形に見られるように、女性らしさも見られた。

そして、二人称代名詞の使用で最も多いのは「あなた」である。以下、「あんた」、「きみ」、「お前」という順である。「あんた」は「あなた」の変形である。金丸(1997:17)は、「あんた」は「あなた」と同様に、男女共通に用いられると述べている。さらに、「あんた」は「親愛を込めて用いられる場合」が多いと述べている。一方、小林(1999)の職場における自然会話コーパスにおいては、「あなた」、「あんた」を用いる発話者はすべて女性であった。すなわち、「あんた」は「女性用」の表現なのか、または「男性用」の表現なのかについて、先行研究の中で意見が割れている。したがって、これを筆者は検証するために、NUCC で抽出したデータを考察していく。

NUCC から 215 例を抽出した。女性による使用例は 182 例が見られた。複数形を除くと、女性による使用例は 177 例であった。使用人数に関して、男性発話者は 39 名のうちで 6 名が用いていた。女性発話者は 162 名のうちで 42 名が用いていた。男女の使用率を以下の表 6 で示す。使用率は、使用回数/総人数である。

表 6 NUCC に見られた「あんた」の使用

	使用人数	不使用人数	使用回数	使用回数/人
男性	6	31	27	0.69
女性	42	120	177	1.09

表 6 が示すように、NUCC に見られた「あんた」の使用は女性に偏っている。この結果は小林(2011)の結果と一致している。

5. 2. 2. 男性による人称代名詞の使用

NUCC における男性発話者による一人称代名詞と二人称代名詞の使用傾向は、表 7 のようにまとめられる。

表 7 NUCC における男性による人称代名詞の使用

一人称代名詞	回数	比率(%)	二人称代名詞	回数	比率(%)
私、わたし、わたくし	102	10.76	あなた	14	4.98
僕、ぼく	224	23.63	あんた	27	9.61
俺、おれ	622	65.61	君	25	8.90
あたし	0	0	お前、おまえ	215	76.51
わし	0	0	てめえ	0	0
うち	0	0			
総計	948	100	総計	281	100

表 7 が示すように、男性発話者による人称代名詞の使用傾向は女性とかなり異なる。まず、一人称代名詞の場合は、最も用いられるのは「俺（おれ）」であり、6 割以上の比率を占めている。そして、以下は「僕」、「私」という順である。また、「あたし」という「女性用」一人称代名詞は見られなかった。また、「わし」の使用については、NUCC において 19 例が見られた。すべて女性発話者が用いた引用の例であるため、非該当例とした。金水(1989)は、「わし」は「男言葉」であると述べている。しかし、本研究では、男性発話者が用いる使用例は一例も見られなかった。

5. 3. 「おネエ」と一般男性が用いる「男性用」人称代名詞の異同

本節では、NUCC における男性発話者とバラエティー番組における「おネエ系タレント」が用いる一人称代名詞と二人称代名詞の共通点・相違点を考察する。

まず、両者が用いる一人称代名詞については、「私」を頻繁に用いることは共通点であると言える。そして、一般男性と一部分の「おネエ」が「ぼく」で自称することが多い傾向が見られた。漫画などのフィクション作品でよく「男性用」の自称詞として用いられる「わし」は、NUCC とバラエティー番組のデータの双方において使用例が見られなかった。これに対して、相違点は主に 2 点ある。第一点は、「おネエ」が最も多く用いたのは「あたし」であるが、NUCC における男性発話者の使用例は 1 例もなかった。2 点目は、「おれ」の使用である。『精選版 日本国語大辞典 第一巻』(2006:892)は、「俺」が「男子が、改まらない場面で同等もしくは目下に対して用いる」と述べているように、「男性性」が強い一人称代名詞であると考えられる。NUCC のデータに最も多く見られた一人称代名詞は「おれ」である一方、「おネエ系タレント」による使用回数はわずか 3 回である。

次に、両者が用いる二人称代名詞の使用傾向を考察する。結果は以下の表 8 のようにまとめられる。

表 8 男性と「おネエ」による二人称代名詞の使用傾向の比較

		あな た	あんた	きみ	おま え	てめ え	合計
NUCC	用例数	14	27	25	215	0	281
	頻度(%)	4.98	9.61	8.90	76.51	0	100
番組	用例数	55	206	3	94	8	366
	頻度(%)	15.03	56.28	0.82	25.68	2.19	100

表 8 が示すように、NUCC における男性発話者の二人称代名詞使用と「おネエ系タレント」が用いる二人称代名詞の共通点は、両者とも「おまえ」の使用が多かったことである。相違点は主に 2 点ある。まず、「おネエ」が最も多く用いた「あんた」は、男性発話者の使用が少なかった。そして、「てめえ」の使用は NUCC においては一例も見られなかったが、「おネエ」による使用は見られた。使用したのはマツコ・デラックス、はるな愛、ミッツ・マングループの 3 名である。「てめえ」は卑罵表現なので、NUCC のような録音されている日常会話コーパスでは使用が避けられるが、「おネエ」はいわゆる「毒舌表現」をよく用いる特徴があるため、バラエティー番組では笑いをとるためにあえて用いているという解釈が可能である。

5. 4. 「役割語」との関係

「役割語」という術語は、金水により提唱され、現在の日本語研究において非常に重要な術語である。金水(2003)は、ある特定の人物像と特定の言葉遣いがつながる際に、その特定の言葉遣いを「役割語」と呼ぶ。これは、フィクションにおける言語の分析に用いられてきた概念であるが、現実世界の言語の分析にも適用することが可能であると考えられる。「おネエことば」は、「おネエ」という独特なグループの人が用いる言葉遣いであり、世間に広く知られている。したがって、「おネエことば」は一種の「役割語」であると考えることができる。

この「役割語」の言語特徴を明らかにするために、人称代名詞だけを考察するのは不十分であるが、本稿は人称代名詞の使用だけを考察した。具体的には、以下の特徴があると考えられる。

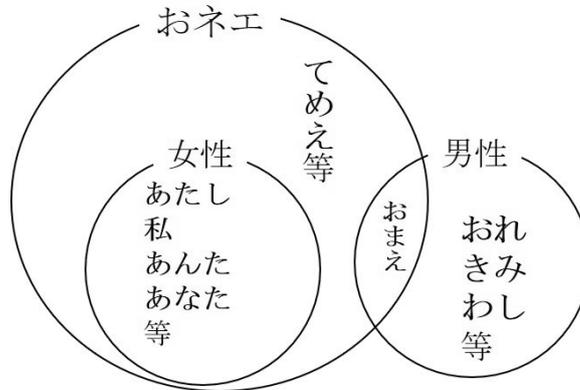
まず、一人称代名詞の場合は、「女性用」の表現が多く用いられる傾向がある。例えば、「あたし」と「私」である。また、一部分の「おネエ」は、「男性用」の「僕」だけを用いていたが、「男性性」が強い「おれ」の使用は見られなかった。一方、二人称代名詞の使用には、「女性用」の「あんた」と「あなた」の使用が多く見られた。「あんた」は、女性が非公式的な場面で、親しい関係の相手に用いる「親愛表現」の一種であると考えられるため、「おネエ」同士では、多く見られた。「あんた」以外に多く用いられたのは「おまえ」である。「おまえ」は男性が同等または目下の相手に用いる改まらない表現であると考えられる。すなわち、今回の考察を通して、「おネエ」が用いる二人称代名詞の使用傾向は、一般男女が用いる表現が混ざり合っているといえる。

5. 5. まとめ

今回の考察を通して、人称代名詞の使用について、「おネエことば」と一般男性および一般

女性が用いる表現の関係を以下の図1のように示すことができる。

図1 「おネエことば」、「男性用」表現、「女性用」表現の関係



「おネエことば」は「女性用」の特徴をすべて備えるのに加えて、「男性用」の一部の特徴も備えている。しかし、「男性用」の一人称代名詞にはない表現も見られたため、「男性用」表現と「女性用」表現に一部分の独特な言い方を備える言語形式であると考えられる。

6. 今後の課題

金水(2003:205)は、日本語の役割語にとって重要な指標は「人称詞」と「文末表現」であると述べている。また、金水(2011:9)は、現代日本語においては言語の性差がなくなりつつあるため、「かしら」など典型的な「女ことば」を使用する人は、年齢が高い女性、またいわゆる「ニューハーフ」と「おかま」などトランスセクシュアルなキャラクターであると指摘している。これらの研究は「役割語」の研究にとって、「文末表現」は重要な指標であることを明らかにしている。本研究は「人称詞」の一部分である「人称代名詞」を分析した。今後は、残された「文末表現」の分析を行いたい。

注

- (1) 対象者の前田健は本研究のデータのうち、1度だけ女装したことがある。それは「さんまのホントの恋のかま騒ぎ」(2012年1月3日放送分)である。
- (2) 本人が2016年9月24日放送の「マツコ会議」などの番組で語ったことがある。

引用文献

阿部ひで子ノース「昭和の男娼のことばの分析：『お姐さん』のことば」遠藤織枝・小林美恵子・桜井隆(編)『世界をつなぐことば：ことばとジェンダー／日本語教育／中国女文字』、六十五～八十頁、東京：三元社、2010年。

- 阿部ひで子ノース「ゲイ／オネエ／ニューハーフの言葉：男性語と女性語のあいだ」『日本語学』、第三十三（一）巻、四十四～五十九頁、東京：明治書院、2014年。
- 金丸芙美「人称代名詞・呼称」井出祥子（編）『女性語の世界』十五～三十二頁、東京：明治書院、1997年。
- 河野礼実「テレビにおける男性の女性語使用：いわゆる『オネエ言葉』について」『国文』、第百九巻、百十二～百頁、2008年。
- 河野礼実「“おネエ”のキャラクタの人称：バラエティ番組とフィクション作品を材料に」『比較日本学教育研究センター研究年報』、第十二巻、百十五～百二十二頁、2016年。
- 金水敏「代名詞と人称」北原保雄（編）『日本語の文法，文体（上）』（講座 日本語と日本語教育4）、九十八～百十六頁、東京：明治書院、1989年。
- 金水敏『ヴァーチャル日本語 役割語の謎』、東京：岩波書店、2003年。
- 金水敏『役割語研究の展開』、東京：くろしお出版、2011年。
- 黒須理紗子「女ことば・男ことばの研究：差異と変遷」『日本文学』第百四巻、百八十七～二百三頁、2008年。
- 小林美恵子「自称・対称は中性化するか？」現代日本語研究会（編）『女性のことば（職場編）』、百十三～百三十七頁、東京：ひつじ書房、1999年。
- 真田信治「属性とことば」真田信治・渋谷勝己・陣内正敬・杉戸清樹『社会言語学』十七～二十八頁、東京：おうふう、1992年。
- 小学館国語辞典編集部『精選版 日本国語大辞典』、東京：小学館、2006年。
- 鈴木孝夫『ことばと文化』、東京：岩波書店、1973年。
- 鈴木千寿「『女性語』を多用する男性は『おかま』か」『ことば』、第十九巻、六十九～九十一頁、1998年。
- 西田隆政「『ボク少女』の言語表現：常用性のある『属性表現』と役割語との接点」『甲南女子大学研究紀要．文学・文化編』、第四十八巻、十三～二十二頁、2011年。
- 藤村逸子・大曾美恵子・大島デイヴィッド義和「会話コーパスの構築によるコミュニケーション研究」藤村逸子・滝沢直宏（編）『言語研究の技法：データの収集と分析』、四十三～七十二頁、東京：ひつじ書房、2011年。
- 益岡隆志・田窪行則『基礎日本語文法 改訂版』、東京：くろしお出版、1992年。
- マリィ・クレア「『おネエことば』とは何か」『日本語学』、第三十七（四）巻、二十二～三十頁、2018年。
- マルチェッロ・フランチョーニ「『オネエ言葉』定義修正の一考察」『神園=Journal of the Meiji Jingu Research Institute』、第十六巻、百四十三～百四十八頁、2016年。

